Magic Trigger

風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍａｇｉｃ　Ｔｒｉｇｇｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ７３２０Ｕ

【作者名】
風雅

【あらすじ】
魔術が普通に日常で使われている名も無い世界。
そこに生きる少年、空羽雅の戦いの物語。

プロローグ（前書き）

この小説は一昨年位までモバゲーで掲載していた厨二小説のリメイクです。
よければ最後までお付き合いよろしくお願いします。

プロローグ

赤い月が夜空に煌く日の夜半の事だった。
裏路地に銃声が響き渡ると同時に、スーツを着た男が倒れた。
その男を見下す様に立つ白髪（しらが）とは全く違う美しい銀にも見える白（はく）髪（はつ）とまだ幼さの残る中性的な顔立ちの少年が一人。白髪は腰位までの長さがあるが、真紅のリボンでポニーテールに纏めてあり、その顔は男性から見れば美しい女性に、女性から見れば整っている男性に見えるだろう。フード付の黒コートを着ているためにわかりにくいが、体系も中性的だ。
少年はその美しい外見に似合わぬ、銃身が７００ｍｍもあるオートマチック式の長銃を右手に握っていた。この場に少年と男以外に人が居ない事から、少年が目の前で倒れる男を撃ったのだろう。
少年はその男を一視してからその場を立ち去ろうとするが、男が呻き声を上げたのを聞いて、銃身をそちらに向ける。
「…わざわざ止めを刺さなくてもすぐ逝くよ。だからその前に人生最後の一服くらいさせてくれ」
男は壁に寄りかかりながら座り、懐から煙草を取り出して咥えるとまた懐を探り始めるが、男がライターを探すより先に煙草に火が点いた。男はそれに微かに驚き、思わず小さく声を漏らしたが、特に慌てた様子なども無く、すぐに少年に礼を述べた。
「ありがとよ。そう…不思議そうな顔をするな、これでも裏じゃ名のある魔術師だったんだ。ギリギリで致命傷は避けたんだよ」
男は長々と口を開くが、段々とその顔から生気が抜けて行ってるのが誰の目から見ても明らかに解った。だからだろうか、少年は持っていた長銃を文字通りに消して、男を静かに見つめている。
そして、男は暫く煙草を堪能した後に口から煙を吐いてから少年へと向き直った。
「最後に、一つ、聞いていいか？　この俺をあの世へ誘う野郎の名

前を」
　虚ろな目で少年を見つめる男の人生最後の問いに少年は徐にその口を開いた。
「俺の名は空羽。空羽雅（からはねみやび）だ」
　少年、雅の名を聞いて男は目を見開いたが、どこか納得した表情をして、力なく笑う。
「あの…空羽か？　生き残りが居るって噂は、本当だったのか。死ぬのは残念だが…あの世で、自慢…できる、ぜ」
　そのまま男はゆっくりと息を引き取ったと同時に、その手にから煙草が落ちた。
「任務完了」

魔術と世界（前書き）

この物語はフィクションです。

魔術と世界

暗い森の中を、幼い雅が走っていた。手には綺麗な真紅のリボンを持ちながら、我武者羅に、何かを恐れるように、その幼い体に鞭を打ちながら走り続ける。どんなに疲れ様とも、足を止めることは無く、その森の中を駆け抜ける。

暫く走ると森が開け、泉に出た。その泉の周りでは蛍が飛び回り、月明かりで水面が輝いている。雅はその泉の中心部に目を奪われていた。一人の美しい女性が水面に立っていたのだ。

月の女神が降りて来たかの様なその光景と、女性の自身が持つその余りの美しさに、雅は先ほどのまであんなに感じていた恐怖を忘れ、見蕩れていたのだ。

「あら、こんな所に人が居るなんて珍しい。あなた、名前は？」

女性は雅に微笑みながら声をかけるが返事は無い。雅は未だに女性の美しさに見蕩れていた。女性は雅からの返事が無い事で不思議そうな顔をして首を傾げるが、何かに気付いたかのように小さくあっと呟くと、再び目を細めて微笑みながら雅に声をかける。

「そっか、名前を名乗るなら先ずは自分からだったわね。私の名はテミス。あなたは？」

優しくも、どこか凛としている様なその声で雅は我に返り、テミスの問いに答えようと閉ざされていた口を開く。

「僕の名前は雅」

「起きろ、陰陽道雅！！」

雅が自らの名前を名乗ったその瞬間、突如大きな声で呼ばれ、雅は目を開いた。

雅は自らの状況を徐に確認する。場所は雅の通う学校の教室で今は歴史の授業中。どうやらその最中に頬杖をついたまま寝てしまっていた様だ。

（懐かしい夢を見たな）

雅は一回伸びをして自らを起していただろう人物を見上げる。
「起きたか？　陰陽道雅。私の歴史の授業はそんなに退屈か？」
雅を起していたのはまだ２０代前半であろうスーツ姿の凛々しいと言う言葉がよく似合う女性で、その女性はわざとらしく雅をフルネームで呼びながらジト目で雅を見つめる。ちなみに、陰陽道（おんみょうどう）とは雅の表での苗字だ。
「ええ。おはようございます、ナナ先生。疲れが溜まっていた様で眠ってしまいました、すみません」
雅は担任教諭のナナに向けて挨拶をしてから申し訳なさそうに謝る。ナナはわざとらしくため息を吐き、申し訳なさそうにこちらを見上げる雅を見下ろす。
「去年からだが…お前は本当に授業態度が良い時と悪い時の差が激しいな。まあ良い、不問とする代わりに魔術について簡単に説明しろ。ちょうど誰を指そうか考えてたところだ」
先生はにっこりと微笑みながら教壇に戻ろうとするが、雅はそれを呼び止めた。
「先生、今は歴史のじ――――」
「つべこべ言わずにとっと説明する」
ナナは振り返りながら手に持っていたチョークを雅の額に向けて投げた。突然の事にも関わらず、雅は涼しい顔をしながら左手の人指し指と中指でそれを見事にキャッチし、掌で転がす。それを見ていた一部のクラスメイト達から賞賛の拍手が起きた。
「今日もキャッチ出来ましたよ。これで俺の５連勝ですね」
不敵な笑みを浮かべながら挑発的な物言いをする雅をナナは一蹴する。
「ぬかせ、それでも一年前から通算して私の３７勝２９敗だ。お前が勝ち越すのはまだまだ先だぞ？」
二人は互いに火花を散らせながら睨み合い、一触即発の空気が漂うが。
「さて、それじゃあ説明頼むぞ。無論、立ってな」

「了解です」
　二人は何事も無かったか様に振る舞い、ナナは教壇へ戻り、雅は立ち上がった。
「魔術とは人間や動物、植物や空気に流れる不思議な力、魔力を利用することで発動する様々な術の事を総称して指すものです。火を点けたり、水を操ったり、呪術も使用出来たりと用途も様々で、自らの扱える魔術の適正は血筋や育った環境にも異なります」
　雅はどうですかとナナに視線で問う。
「私は簡単にと言ったしな。まあ、いいだろう」
　ナナは小さく頷くと、チョークを手に持って黒板に文字を綴って行く。それと同時に雅は席についた。
「何故私が陰陽道に魔術について簡単に説明させたかと言うと、今日の授業から魔術が世界的に使われ始めた頃の時代についてだからだ。ちなみに魔術が使われ始めたのはたったの７０年前だ。もっとも、魔術自体はもっと昔から在ったんだがな。極一部の者や種族にしか使われていなかったんだ。それが何故現代の様に世界中の貴族から一般庶民まで広まったかと言うと…この戦争が原因だ」
　アストレア戦争。黒板にでかでかとそう書いてからナナは生徒たちと向き合う。
「アストレアはこの街を中心とした地方の呼び名でもあり、王族の姓でもある。それはこの戦争で活躍し、世界を守った英雄の一人でもある初代の王の名がアストレアだったからというのは皆も知っていると思う。そもそも、この戦争はこの地方で封印されていた魔神の封印が解かれたのが原因だが、その原因も詳しくは不明。そして、本来一番重要な筈の何故魔人が封印されていたかなども分からない。それ以前の文献などには魔神の存在を表すような記述は一切無く、唯一の手掛かりの筈の封印跡は魔神自身が跡形も無く破壊してしまったからだ。だからその魔神について分かっていることは少ない。先ず、その魔神の名だ…」
　ナナは一度話しを中断して黒板にその名を書き綴る。かつてこの

世を滅ぼしかけた者の名を。
「ティシフォネ。これが魔神の名前だ。文献によると膨大な魔力を持ち、強力な魔法を使用し、数多くの魔物を生み出したとされている。ティシフォネによって滅ぼされた街や村の数は１００以上、死傷者の数は約１０万人と言われているが、詳しい数は不明だ。そこで立ち上がったのが、最初に登場した初代アストレア王だ」
ナナはここまで言うと再び黒板にここまでの一連の流れを綴る。
「アストレア王はエルフや獣人、竜族等のこの世界に生きる全ての種族の長達一人一人を訪ねて協力を仰いだ」
この世界には人間や通常の動物の他にも様々な種族の者達が生きている。しかし、長い歴史の中でそれらの種族と人間が関わると言うことは全く無かったのだ、この時までは。
「結果として、アストレア王は他の種族に協力を得ることに成功するのだが、それには先ずこの世界の四大元素の精霊達の力を借りたんだ。これは一年の時の魔術の授業でも習った筈だから皆も分かるだろう」
四大元素とは物質は火、風（空気）、水、土の四元素からなるという説だ。魔術も基本はこの説の様にこの四つの属性が基本となっているのだ。さらに、この説を裏付ける物としたのがそれぞれの属性を司る四精霊の存在である。
「と言う訳で…陰陽道。もう一度だ、それぞれの属性の精霊の名を答えろ」
「えっ？」
もう指される事は無いだろうと完全に油断していたのに指された為、雅は声を漏らして驚く。
「あれ一回だけで居眠りが帳消しになるなんて思うな。ほら、さっさと答えろ」
ナナはしてやったりと意地悪く口元を緩めながら雅に早く答えるようにと催促する。雅も反論しようと思ったのだが、元はと言えば原因は自分の居眠りだし、反論した処でナナに口では勝てないと思

っている。何より、それを答えるくらい雅には造作もないことだ。
雅は一つため息をつくと徐に席から立ち上がった。
「地の精霊がノーム、水の精霊がウンディーネ、風の精霊がシルフ、火の精霊がサラマンダーです」
「正解。座っていいぞ」
ナナが頷いたのを確認してから雅は座り、ナナもそれを確認してから再び説明を再開する。
「因みに、魔術師が少ない筈の当時、何故アストレア王が四精霊の存在を知っていたかと言うと、アストレア王はその少ない魔術師の家系の生まれで、祖父から四精霊の存在を聞いていたらしい。
と言う訳で、アストレア王はその四精霊に協力してもらい、他の種族と協議したんだ。四精霊達はこの世界を司る存在とも言える者達だ。他の種族もそんな者達の言葉を蔑ろには出来ないし、何より他の種族もティシフォネにはまいっていた。だから他の種族もアストレア王の考えに賛同したのさ」
ナナは再びここまでの流れを黒板に書こうと生徒たちに背を向けようとした瞬間、一人の女生徒が手を挙げナナを呼ぶ。
「先生。精霊と言うものは簡単に生物の前には現れないし、人間から見つけるのはとても難しいと授業で言ってました。しかも四精霊はそれぞれ生息域が違います。その精霊たちをアストレア王はどの様に見つけたのでしょうか？」
その問いに賛同するようにまじめに授業を聞いていた者達は頷いたり、周りに聞いたりとそれぞれ反応を示す。ナナも感心したかのようにその女生徒を注視した後に説明を求めてナナを見つめる大半の生徒達を一度見渡して一つため息を吐いた。本来進めるはずの授業内容と外れたのだが、まじめに自分の授業を聞いた結果に持った生徒達の疑問をないがしろにするなどナナには出来なかった。
「本来は次の授業で説明する筈だったんだがな」
そう言うと、ナナは黒板に一族の名を綴初めた。ナナがその言葉を書いた瞬間、生徒達は先程とは違う意味でざわめき始めた。まじ

めに授業を聞いていなかった生徒達すらもそれに反応してざわめき始める。それもそうだろうその一族の事は、この世界では口に出すのすら躊躇されるからだ。そして何より、皆にこの世で最も憎むべき一族として一般的な市民の間では有名だったのだ。

「静かにしろ！！」

ナナが注意しても静まることは無い教室の中、周りの事など気にせずに、いや、周りの会話など耳にも入っていないのか、雅は口を開くことも、瞬きもせずに黒板に綴られたその一族の名をどこか悲しみの混じった瞳でじっと見つめていた。

でかでかと黒板の真ん中に書かれた自らの本来の苗字を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7320u/

Magic Trigger

2011年7月21日03時44分発行